

ハーン小路恭子

『アメリカン・クライシス』 ——危機の時代の物語のかたち』

(松柏社、2023年)

本書は、現代アメリカの文学・文化テクストを対象として、危機の時代に生み出された物語とそのかたちの関係性を問い直すものである。ここでいう「かたち」とは、ジャンルや語りの様式、そこで用いられている技術など、主として文化的テクストの形式的側面全般を指している。そうしたかたちがテクスト

の生まれた時代の特定の危機意識とどのようにかかわりながら醸成され、その時代の語りの主流を生み出したり、形式上の革新をもたらしたりしてきたのが、本書の主題だ。

危機といっても本書が扱うのは、必ずしも戦争やテロリズムといった大きな危機だけを指しているわけではない。むしろ重要になるのは、そのような大きな危機とも無関係ではない、日々人びとが抱える生きづらさや不安定さ^{フレカリティ}の感覚であり、いかにそうした漠とした感覚や情動の働きが、人を物語ることに向かわせ、容易には言語化しがたい出来事やそのインパクトにかたちを与えうるのか、ということだ。

わたしの元々の専門は20世紀のアメリカ南部の文学だが、かねてよりのかたちへの関心が自然と文学以外のテクストを分析することへと自分を差し向けたように思う。本書で取りあげられている作品は、文学作品に加えビヨンセのヴィジュアル・アルバム『レモネード』から3Dアニメーション『ヒックとドラゴン』、ホラー映画『キャンディマン』まで多岐にわたる。近年のエコクリティシズムや環境人文学に対する批評的関心を反映して、自然や環境、動物などを扱った作品もそこには多く含まれている。さまざまなテクストのかたちの分析に注力することを通して、危機の時代に物語を語ることがどのように実践され、共有されているのかを、読者に見せることができたらと願っている。

